

【三重大学 広報誌】



WAVE MIE UNIV.

MIE
UNIVERSITY
NEWSLETTER

35

2007

1

January

| 特集 |

育む2

文系2研究科の取り組み

三重大学の地域貢献をリードする
文系大学院の教育

【特集】

育む2

文系2研究科の取り組み

三重大学の地域貢献をリードする
文系大学院の教育

CONTENTS

【View of This issue】

人間を育てる文系教育への期待

● 理事・副学長 | 亀岡孝治

01

【特集 / 学長・学部長・副学部長座談会】

育む2

文系2研究科の取り組み

三重大学の地域貢献をリードする
文系大学院の教育

- 学長 | 豊田長康
- 副学長 | 山田康彦
- 人文学部 | 井口 靖
- 人文学部 | 森 俊一
- 教育学部 | 丹保健一
- 教育学部 | 伊藤彰男
- | 司会 | 理事・副学長 | 森野捷輔

02-05

【RESEARCH FRONT 1】

ウズベキスタンを舞台に
行政における「日本モデル」を発信

● 人文学部教授 | 樹神 成

06-07

【RESEARCH FRONT 2】

歴史から現代社会を考える視点を獲得し、
現代の諸問題を考察する

● 教育学部教授 | 東 晋次

08-09

【RESEARCH FRONT 3】

新しい食資源、医薬用資源として
海藻の機能の人々の健康に役立てる

● 生物資源学研究科教授 | 天野秀臣

10-11

【RESEARCH FRONT 4】

多様な学習形態を実現する
空間づくりを研究

● 工学研究科教授 | 今井正次

12-13

【CLOSE-UP Interview】

地域の疾病の原因究明が、
世界の神経難病への新たな光に。

● 医学系研究科教授 | 葛原茂樹

14-15

【TOPICS】

日本機械学会「流体工学部門賞」を受賞
「Certificate of Merit」を受賞

2006年6月～11月
三重大学の主な出来事

16



人間を育てる 文系教育への期待

理事・副学長(情報・国際交流担当)

亀岡孝治

国立大学法人に姿を変えた三重大学も、無事にその最初の3年間を終えようとしています。国立大学法人の生みの親である小泉内閣はその任期を終え、安倍内閣に交代しましたが、この交代の前後に垣間見えてきた倫理体系が崩れつつある日本の実態は、実は国立大学法人にも少なからず暗い影を落としています。

日本中に蔓延する、倫理観・義務感・想像力・責任感・批判精神・歴史観・国際感覚の喪失。「日本には技術があってもシステムがない」「世界標準とよく似たシステムはあっても魂が入っていない」などなど、最近の日本でさまざまな形で生じている文系力喪失が引き起こす事件は、グローバル市場における採算性重視教育の産物といっても過言ではありません。

このような土壌の上で私たちが「地域社会へ貢献できる高度専門職業人」の育成を考えなければならないのだとすれば、高度な専門教育の前にまずなによりも「高度な人間になる」ための教養教育・文系教育が必要なのです。

マーサ・ヌスポム氏(シカゴ大学法学部哲学教授)は、「人を便利な機械に変えるのではなく、人を育てる教育」の必要性を説いています。そのためにできることは、まず自己あるいは自国を客観的に捉える方法を学ぶことでしょう。一つは時間軸で相対化する方法、もう一つは異なる空間から眺めて相対化する方法です。前者の一例が「歴史に学ぶ」ことでしょうし、後者の一例が「海外から眺める」こととなります。このような学生の「内なる目」の育成を併せて行う、本当の意味での歴史教育、国際教育という文系教育が、今、必要とされています。健全な倫理観・義務感・想像力・責任感・批判精神・歴史観・国際感覚を持つ人間を創り上げるための「三重大学の文系教育の新たな体系化」。私たちは今、このことの意味を真剣に考える時にきているのではないのでしょうか。

かめおかたかはる
農学博士
専門分野は、生物情報工学
1955年生まれ





三翠会館にて（写真左から）伊藤彰男、丹保健一、山田康彦、豊田長康、井口 靖、森 俊一

◎特集／学長・学部長・副学部長座談会

育む2

文系2研究科の取り組み

三重大学の地域貢献をリードする 文系大学院の教育

大学院教育の実質化が求められる今、三重大学の文系大学院においても教育改革が課題となっています。今回は学長と人文学部並びに教育学部の学部長、副学部長が集まり、大学院教育のあり方や将来展望について語り合いました。

学長
豊田長康

副学長
山田康彦

人文学部
井口 靖

人文学部
森 俊一

教育学部
丹保健一

教育学部
伊藤彰男

高度専門職業人の養成に向けた 文系2研究科の取り組み

司会 本日はお集まりいただきありがとうございます。大学院教育の実質化に向け、文系2研究科も努力されているところだと思いますが、まず大学院教育の理念・目的についてお聞かせください。

井口 人文社会科学研究科には地域文化論専攻と社会科学専攻がございます。従来の大学院と違うのは、既存の学問の枠を超えた学際的、総合的な面も兼ね備えている点です。これにより複雑化、多様化する現代社会に柔軟に対応できる研究者、あるいは高度専門職業人を育成したいと考えています。

丹保 教育学研究科は3専攻に分かれており、学校教育専攻は学校教育専修、障害児教育専攻は障害児教育専修、教科教育専攻は国語、社会など教科ごとの専修を形成しています。学生だけではなく、三重県と連携し現職教員のリカレント教育（※1）も対象に、現場の課題を改善できる高度な教育を担う教員養成を目指しています。

豊田 三重大学の文系大学院の主眼は、地域社会へ貢献できる高度専門職業人の育成であると思います。地域圏大学としてより実学的な方向に進むことは、地域から支持され期待される大学としての発展につながるはずですよ。

司会 育む人材のイメージや留学生の状況、地域ニーズへの対応についてはいかがですか。

井口 人文社会科学研究科は一般選抜の他、社会人特別選抜、外国人留学生特別選抜を行い、有職者向けの昼夜開講、短期在学コース、長期履修学生制度を設けています。一般の学生については高度専門職業人の養成が目標です。社会人については、地域文化論専攻では地域全体の教養の向上を目指し、社会科学専攻では社会人の再教育、実際の社会に役立つ知識の修得を支援しています。

森 人文社会科学研究科の大きな特長は社会人向けの昼夜開講制で、県庁や市役所、企業の方など地域の方が来られています。地域文化論専攻も社会科学専攻も、社会人を受け入れて再教育する面で、地

域貢献への志向を持っています。

丹保 教育学研究科の対象は、既に教員免許を取得された方で、大学院ではその上のレベルの専修免許が取得できます。また、専修免許を取得できる単位制の公開講座を開くなど、現職の先生も含め三重県全体を底上げできるリーダー育成を進めています。留学生については質の保証のため徐々に敷居を高くする一方で、天津師範大学や河南師範大学などと連携して優秀な学生の確保に努める他、三重県や四日市市とも連携しています。留学生にとって問題の一つである宿舎については、幸い全学的に宿舎確保の方針が決まりました。DD（ダブルディグリー）制度の導入および受け入れ留学生に対する宿舎の確保は、全国的にもまれです。三重大学が先頭を切ればインパクトは強いと思います。

伊藤 私は今後の研究者は大学教員や研究機関の研究員のイメージだけではなく、実践的な研究者というイメージで展開を図ることがますます必要になる気がします。三重県は南北に長く、地域の抱えている課題も全く違うわけです。そのため高度職業人養成という側面と同時に、課題と一緒に解決し得る実践的な研究者という側面から、地域のニーズを再把握することも必要でしょう。

山田 人文社会科学研究科でも教育学研究科でも、高度専門職業人の養成が目的ということですが、それにふさわしい大学院の制度が整っているかどうか、教育研究のあり方が目的にかなっているかどうかを検討していかなければいけないと思っています。また日本の大学院は、高度専門職業人を育成する教育研究プログラムを開発しきれていないというのが現状です。本当に実践的な研究者を養成する新しい教育と



研究のあり方を研究して、ニーズに応える中身を作っていかなければなりません。

豊田 やはり高度専門職業人といっても、教えられた知識と技術をそのまま実施する

だけの人材ではいけないのであって、現場の問題点を自ら発見・解決して、新しいことを創造するのが本当のプロフェッショナルだと思います。結局、三重大学の教育が地域社会において評価されるのは、三重大学の卒業生が非常に優秀な人材であると評価されるかどうか、つまりアウトカムによってです。ですから、優秀な人材に入学してもらい付加価値を加え、社会に評価される人材を送り出すことが大事だと思います。



実質化、国際標準を見据えた 教育カリキュラムの構築

司会 大学院教育と研究のバランスや、教育の国際標準との合致についてはいかがですか。

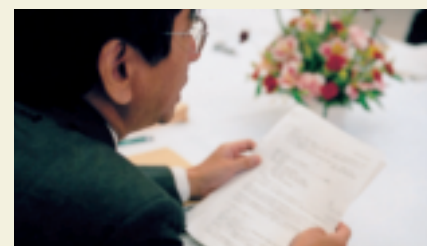
井口 ひとつの試みとして、「三重の文化と社会」という授業では、自分の専門分野に根ざしつつ、三重の地域の問題を発見・解決し、その成果を地元で発表するというを行っています。教員の研究と教育をうまく組み合わせながら進めることで、問題発見・解決できる人材を地域に戻していけるのではないかと思います。また、標準化については国立大学法人17大学人文系学部長会議で、相互評価のシステムを作ったかどうかという話が進んでいます。

森 高度専門職業人として自立していくには、狭い専門領域だけに知識が偏っては困るわけです。そこで社会科学専攻では、行政や企業活動に携わるといった人材養成を念頭に、法・政・経を融合した地域行政政策専修と、民事関係の法律や経営学を一緒にした地域経営法務専修を設けています。行政機関や企業に勤めながら、日常的に直面する問題に右往左往するのではなく、全体を捉えて指針を見出し、仕事や実践活動で応用できる手がかりや理屈を大学院で学んでもらう。それが大学院教育ではないかと思います。

育む2

文系2研究科の取り組み
三重大学の地域貢献をリードする
文系大学院の教育

丹保 研究と教育の兼ね合いでは、私は学生が修士論文で自分の研究を進めていくことは、全く問題ないと思うんです。むしろ教育学部の学生が自信を持って現場に出るためにも、得意分野、研究コアを持った学生を育てなければいけないわけです。また、実質化、国際標準化については、教育大学協会で認証評価の問題を議論しています。**伊藤** やはり、既存の研究者を養成するドクターコースの問題が影響していると思います。それは限りなく細分化を追求しているわけで、今後は専門科目を開講するだけではなく、それぞれの学問領域の問題にコミットする授業科目も含めたカリキュラム編成をしなければなりません。また、人文と教育の持ち味を合わせて、三重県の地域課題に応えられるような新しい大学院を検討したり、後輩の育成を担う人材を文系も育てる必要があるのではないのでしょうか。**豊田** 実際の研究は狭い範囲であっても、学生にはそれをさまざまな問題解決に応用できる力を身につけさせることが大切です。そのための教育カリキュラムの工夫がぜひとも必要であろうかと思えます。もちろん、ただ現場に放りこむのではなく基礎的な理論も絶対に必要です。現場の中で問題点を見つけて、それに必要な基礎理論などを学ぶ現場密着型PBL(※2)などの手法を、大学院実質化に向けて考えなければなりません。



山田 従来の専門性を押さえていく筋と、実践性、総合性の筋を用意し、それぞれが融合的な形になっていくカリキュラムが求められていると思います。それを踏まえながら国際標準を考えるとときに、例えばJABEE(※3)の学習・教育目標を見ると、特殊な知識や技術ではなく、非常に原理的であり総

合的な能力が示されているわけです。これらを文系大学院に置き換えて考えていくことが必要で、それが実質化や国際標準につながっていくのではないのでしょうか。

文系大学院の価値を訴え、教育能力重視の教員採用も

司会 学部教育と大学院教育のつながりについて、お考えをお聞かせください。**井口** 人文学部ですと大学院を前提とするわけにはいかず、学部教育で完結する形を考えざるを得ないところはあります。やはり文系の場合、就職の問題が大きく、大学院で2年間さらに教育しているわけですから、企業でもその点をご理解いただき門戸を開いていただくようになると、私たちが学部、大学院一貫した教育ができて、社会に送り出せるのではないかと考えています。**森** 私は社会人の再教育を軌道に乗せたいと考えています。企業人、公務員、市民の再教育の場として人文社会科学研究科を地域社会から位置づけていただければ、これが地域貢献の最大のものになるとも思っています。ですから、大学院と学部が連続してあるというより、一旦区切りがあっても、大学院が社会人教育の中心になれば良いと考えています。

丹保 教育学研究科では現職教員のリカレント教育を行っていますし、学部生については教職に関連する専門的な知識を深める指導をしています。まだ一貫的な制度にはなっていないですね。**伊藤** 教育学部の場合、大学院を出ると教員免許が専修免許にレベルアップされます。だからこそ学部教育が不十分なままで、それを大学院まで延長することということでは何にもなりません。**山田** 文系大学院の就職の問題は、やはり大学院に行くメリットが社会的に明確ではなく、そのメリットをはっきりさせることが必要です。高度専門職業人の養成が目的であれば、専門職大学院的な性格を

持った大学院を確立していく。いわゆる研究者養成で行われる研究とは違い、研究者自身がより実践的な研究ができたり、それに応用できるような原理的、総合的な研究ができる環境も用意されなくてははいけません。



司会 教員確保の方針や選考ポイントについてはいかがででしょうか。**井口** 人文学部では、これまで主に研究能力、業績や研究論文中心に選考してきましたが、現在は採用時に教育面での抱負を教育研究計画書に記述してもらい、それも選考資料にしています。また、検討段階ではありますが、担当予定の授業のシラバスを出してもらい、模擬授業をしてもらうなど、教育の実践能力を見て採用する方針も考えています。**森** また、任期付きの教員も採用しています。アカデミックな世界だけで研究してきた人間ではなく、厚生労働省で政策立案経験のある人など現場のことをよく知っていらっしゃるような人もスタッフに加え、学生の指導や教育にあたらうとしているのが特長ではないのでしょうか。**丹保** やはり大学教授においても研究能力だけあって、人間としてどうかという人は、研究者、教育者以前の問題です。教育学部では、各専攻で常識や人間性などいろいろな項目をチェックできるよう、面接や情報収集して判断しています。また、学生の満足度同様、職員の満足度も上げていくということが、優秀な人材確保につながり教育の質も上がっていくと思っています。**伊藤** これからの教員に求められる最大の力は、管理運営能力です。研究や教育をやっていれば良いという気持ちでは、今

後は対処できません。この管理運営能力は大学内で必要なだけではなく、共同研究を行う場合にも同じように必要だと思います。**豊田** 両学部・研究科とも研究能力や研究実績だけの評価ではなく、教育の評価をしようとして努力されているわけですね。人格面の評価は大変難しいですが大切なことですので、選考方法の工夫をしていくべきだと感じました。また、学生満足度や教職員満足度を高め、三重大学を魅力に感じるような取り組みも進めたいと思います。

文理融合型大学院、大学教育GPへの挑戦

司会 では最後に、文系大学院の将来展望をお聞かせください。**井口** 先ほどお話しした「三重の文化と社会」は全国的にも非常にユニークな試みであり、特色GP(※4)の対象となり得ると自信を持っています。地域に根ざすもので今後の発展性も見込めますし、PBL的要素が非常に強く、ぜひともGPに挑戦したいと思っています。**丹保** 教育学研究科では、教職大学院を目指す前提として大学院の教員養成GP(※5)を取ろうと大学院改革を進め、その一環として2年間の現場実習を単位化しようと考えているところです。また、今年は地域連携という形で現代GP(※6)をいただき、附属の他、地域の中学校や小学校、幼稚園と連携して、地域の活性化と人材育成という2面から連携をしようと進めています。今後は国際交流での現代GPも考えています。**司会** 人文と教育が一つになった、文系の新しい大学院の展望についてはいかが



でしょうか。**伊藤** 三重大学が重点を置くべきなのは、やはりアジア地域ではないでしょうか。アジア地域に関する日本の一大拠点へと三重大学が発展するために、その中核を担える人材を養成する大学院を考えていくことはできないかと思っています。そこには語学、経済といろんな問題が絡んできますので、既存の学問領域ではなしに、人文、教育、理系も組み入れた形で、課題に対応したチームを編成しつつ大学院を構成できればと考えています。



森 文理融合で実績もあって実現しやすいのは、環境をキーワードにしたものかと思えます。環境政策や環境教育は文系ですし、環境技術や土壌の改善、あるいはエネルギー改革などは生物資源学部や工学部の専門領域です。また、公害による疾病や公衆衛生全般については医学部の専門領域なので、環境をキーワードにすると文理融合型大学院は構想しやすいと思います。**豊田** 人文・教育共通の大学院をというご意見については、まだ今日の段階では結論は出ませんが、やはり文系が中心となった将来構想を真剣に検討すべきではないかと思っています。法人化されて2年半たち、国立大学の存在意義は何か、特に地方大学の存在意義は何かと問われています。それはいかに地域貢献できるかということですが、皆様のご意見をうかがって、大学院のあり方によって今まで以上に地域に貢献できることを確信させてもらった次第です。三重大学の持てる力を発揮して地域に貢献し、さらにその機能を大きくしていきたいと思っています。

司会 本日はありがとうございました。

- (※1) リカレント教育
職業能力の向上や人間性を豊かにするための社会人の再教育。
- (※2) PBL
PBLチュートリアル教育。学生が少人数で自主的に取り組む問題発見解決型教育・学習
- (※3) JABEE(日本技術者教育認定機構)
世界に通用する技術者を育てるために技術系教育カリキュラムの審査・認定を行う機構
- (※4) 特色GP
文部科学省の特色ある大学教育支援プログラム。大学教育の改善に資する種々の取組のうち、特色ある優れたものに財政支援を行う。
- (※5) 教員養成GP
文部科学省の大学・大学院における教員養成プログラム。資質の高い教員を養成するための特色ある優れた教育プロジェクトに重点的な財政支援を行う。
- (※6) 現代GP
文部科学省の現代的な教育ニーズ取組支援プログラム。社会的要請の強い政策課題に対応した、特に優れた教育プロジェクトに財政支援を行う。平成18年度、本学の「教育実践力の育成と学校・地域の活性化」が採択された。
(GP:グッドプラクティス)

| プロフィール |

- 豊田長康** とよだながやす
学長 医学博士
1950年生まれ
専門分野は、産科婦人科学・周産期医学・生殖内分泌代謝学
- 山田康彦** やまだやすひこ
理事・副学長(教育担当) 教育学修士
1954年生まれ
専門分野は、美術・芸術教育学
- 井口 靖** いのくちやすし
人文学部長 文学修士
1955年生まれ
専門分野は、ドイツ語学・言語学
- 丹保健一** たんぼけんいち
教育学部長 文学修士
1948年生まれ
専門分野は、国語学
- 森 俊一** もりしゅんいち
人文学部副学部長 経済学修士
1949年生まれ
専門分野は、財政学
- 伊藤彰男** いとうあきお
教育学部副学部長 教育学修士
1943年生まれ
専門分野は、教育学
- ◎司会・進行
森野捷輔 もりのしょうすけ
理事・副学長(研究担当) 工学博士
1942年生まれ
専門分野は、建築構造学

ウズベキスタンを舞台に 行政における「日本モデル」を発信



人文学部教授
樹神 成

こだましげる
法学修士
専門分野は、行政学、比較行政、
比較地方自治
1957年生まれ



90年代、グローバル化を背景に行政制度が改革された日本。一方、社会主義国では市場経済への移行が進み、日本には、法制度や行政制度の構築支援が求められています。三重大学人文学部では、JICAのプロジェクトとして形成され、ドイツとの共同プロジェクトとして発展している、ウズベキスタンの行政改革推進のための法整備支援事業に参加することで、発信型行政研究の礎を築こうとする試みが始まっています。

グローバル化を背景とする改革

日本の1990年代、バブルは崩壊し、高かった経済成長率も他の先進国に逆転され、それまでの有頂天の雰囲気は一変して「失われた10年」という悲観論が蔓延しました。しかし、行政の制度に目を向けると、行政手続法、地方分権、中央省庁等改革、政策評価法、そして情報公開法と、その内容に限界があるとしても、日本の近現代の歴史のなかでも大きな変革の10年でした。

「改革の時代」の背景はグローバル化です。戦後の日本を支えた行政の制度は、政府と市場（企業）との関係が不透明であり、非関税障壁として機能しかねないとの欧米先進国からの非難にさらされ、日本国内では、戦後の制度が「制度疲労」に陥っているという議論が



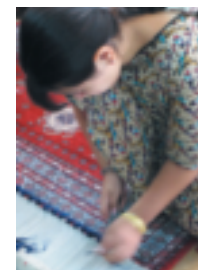
ウズベキスタンは資源と食糧が豊か。バザールには果物が溢れる。



イスラム文化の中心だった
サマルカンドの神学校。(世界遺産)



スターリンにより強制移住させられた
朝鮮族の人々。



絹の絨毯はベルシャの影響。
農山村出身の女子が作業に従事。



パンはインドと同じ非発酵タイプ。
女性の伝統衣装は色・図柄に土地の特徴。

なされていきます。「改革の時代」の背景がグローバル化だったがゆえに、改革は、「保守対革新」の対抗軸においてではなく、「保守の自己革新」「日本型経営の自己革新」として実現したように見えます。

社会主義国の市場経済への移行

グローバル化によって制度の見直しを迫られたのは、日本だけではありません。欧米先進国の行政改革は、その内容はさまざまですが、グローバル化への対応の一形態であると言えます。しかし、グローバル化の影響をもっとも強く受けたのは、そして受けているのは社会主義国であったと言えます。ソ連は1991年に崩壊しました。中国は1989年の天安門事件が国際的に批判されますが、この年から中国への海外投資が増加し、市場経済への移行が進み始めました。現在では、ベトナム、ラオス、カンボジア、モンゴル、そして旧ソ連圏の中央アジアやコーカサス地方でも、市場経済への移行が進みつつあると見ることができます。北朝鮮の問題はやや特殊ですが、長い目で見れば、同じ道を辿るのではないのでしょうか。

求められる法制度、行政制度の構築支援

社会主義国であった国で市場経済への移行を指向している国は、市場経済に対応した行政制度や法制度を構築するために日本の支援を求めています。例えば、中国共産党が権力を掌握する中国では、市場経済への移行が進むとともに、政府と市場（企業）との関係が見直され、行政手続法の制定が課題となっています。

しかし日本は、製造物を輸出することは得意でも、法制度や行政制度については今でも輸入国であればよいという惰性が官民を問わずその体に染みついているため、行政制度や法制度の支援を求める国の要望に適切に対応できていません。私は1990年にペレストロイカ末期のモスクワに留学していましたが、アメリカの法律家は、当時すでに市場経済への移行に向けた法整備の支援をめざしてロシアに進出していました。その後、2004年に法整備支援のプロジェクト形成のためにJICAからウズベキスタンに派遣され、ウズベキスタンの司法省で大臣や副大臣と交渉しながら仕事をしました。プロジェクト形成にまず必要であったことは、現地の日本の官民に十分な理解を得ることであり、すでにこうした理解を得て法制度や行政制度の構築のための支援を積極的に進めようとするドイツ、あるいはアメリカの動きを横目で睨みながらの仕事でした。

ウズベキスタンでの支援を出発点に

これからの日本の課題は制度の輸入国から制度の支援国、そして制度の発信国に転換できるかどうかにあると思います。そのためには、戦後の日本の行政制度や法制度の経験のなかに、世界に発信できるものがあるかを確定する必要があります。幸いなことに、ウズベキスタンで、行政改革推進のための行政手続法制整備支援、担保・抵当法制整備支援、そして法令データベース関連支援のプロジェクトを形成することができました。とくに、行政改革推進のための法整備支援は、ドイツとの共同プロジェクトとして発展しつつあります。ウズベキスタンの行政改革推進のための法整備支援にはアメリカの研究者も関心をもっていました。日本の行政改革支援について、ウズベキスタン側の意見を聞き、ドイツやアメリカとの支援と日本の支援を比較することで、まさにグローバルな視野から、日本の制度の国際的な位置を探り、これからの発信型行政研究の出発点を築く道が開かれつつあると考えています。それは、日本型行政制度の発信可能性を考えながら、制度輸入国であった日本の近現代を考えることでもあります。



教育学部教授
東 晋次

ひがししんじ
歴史学博士
専門分野は、中国古代史
1944年生まれ

歴史から現代社会を考える視点を獲得し、 現代の諸問題を考察する



「任侠」というと、暴力的な世界を思い浮かべますが、そこには、人と人との生死をかけた友愛関係が存在します。三重大学教育学部では、現代社会への示唆に富んだ歴史学の視点から人間の普遍的な心性もうかがえる任侠的な人間関係に注目し、現代のさまざまな問題を研究しています。

『三国志演義』に見る生死をかけた契り

『三国志演義』といえば、日本人にも人気のある中国の歴史小説です。その冒頭、「桃園に宴し豪傑三たり義を結ぶ」で、劉備と張飛・関羽との義兄弟の契りが結ばれ、その生死を共にする信義の関係は終生変わりませんでした。諸葛亮と劉備の関係もそれに近いといってよいかもしれません。中国史上に見られる、このような人と人との生死をかけた結合関係は、現代の我々にはもはや無縁なものなのでしょうか。人はなぜ『三国志演義』に魅かれるのでしょうか。

各地で生まれた任侠的結合関係

中国古代の春秋時代末、前5世紀前半頃に「任侠的結合関係」と呼ばれる人的結合関



漢代の画像石に描かれた、刺客の荊軻が秦王（始皇帝）を襲う図。荊軻の死後、彼の友人で、筑（古代の楽器）の名手である高漸離が、始皇帝に対し復讐を図るが失敗して殺される。



自由主義者による政治運動（名古屋事件）に多数の博徒も参加していた事実を克明に調べ上げ、自由民権運動の見直しを迫った長谷川昇『博徒と自由民権』（平凡社）



これまでの後漢時代史研究の成果。『後漢時代の政治と社会』（名古屋大学出版）『王莽一儒家の理想に憑かれた男一』（白帝社）

係が発生しました。「任侠」の定義は難しいのですが、ひとまず「恩（徳）や信・義を媒介にして、気力（勇気）をもって利他行為を敢行すること」としておきます。それは、ただ単に同情し親切心を発揮するというのではなく、あくまでも己を認めてくれた他者に対する返礼として、敢えて危難に向かい身命をも賭す心情的倫理と行動のことです。これに類似する世界史上の人間関係として、ローマの時代に、フィデス（信義）にもとづく忠誠関係としてのクリエンテラがあり、イスラム社会でのフツフ（寛大さ）の徳を尊ぶフイトヤーンやアイヤールという任侠の徒の存在も知られ、その集団は都市の防衛や治安維持にも重要な役割を果たしました。

時代を超えて普遍的に存在する心性

我々の生きる現代とは異なり、前近代社会では「法の支配」が貫徹していません。人々の共同意志が結集された法がすべてを律するのではなく、支配権力を掌握したものが、秩序維持を名目に人々の意志を左右しようとして上からかぶせてくるのが法網であり、それ自体が一つの暴力です。そのような社会で、自分を護るために必要な処置をとらなければならないとしたら、暴力的手段に訴える他はない、つまり「自己救済の論理」で生き抜いていかざるを得ないでしょう。任侠者が往々にして権力に抵抗する集団を結成したり、法禁を犯すのはそうした理由によります。江戸時代の仇討ちに見られる復讐もその一つです。現代において、肉親を殺された人びとの心に胚胎する、加害者への復讐の欲求はその名残と見ることもできます。これは時代を超えて普遍的に存在する心性ではないでしょうか。現代世界の各地に広がる紛争も、そのような心性によって支えられている部分がないとは言えないと思います。この暴力的手段に訴える際に、前近代社会では任侠者がその助力者として活躍するケースが多かったのです。「弱きを助け強きをくじく」任侠道に生きる侠客と呼ばれる人びとが、数多く日本の歴史にも名を残しております。

「任侠」を現代社会を考える思考拠点に

歴史学は、単に過去の姿を明らかにすることにのみ、その目的があるわけではありません。現代社会の在り方やその行く末を考える視点を獲得する学問でもあります。中国古代の時代区分論や後漢時代史に関する純然たる歴史学上の諸問題の解法に研究の重点を置いてきた私が、ある時から、任侠的結合関係に注目するようになりました。生死をかけて結びつく友愛の関係は、時に第三者を殺傷する暴力行為を生み出してしましますが、友愛性と暴力性が最もハッキリと表れる任侠的結合関係における人間心性の基本構造や、そうした関係の歴史的变化と地域的在り方の相違の追究を通じて、現代社会を反省する一つの思考拠点にしたいと思ったからです。例えば、大人及び子供の世界双方に見られる「イジメ」を生み出す機軸の解明は緊要な課題です。NHK番組「プロジェクトX」に現れるような、意気に感じ、理想の実現や課題の解決に向かって協力し合う人間関係は、どのようにすれば形成可能でしょうか。これは、規則や慣習に縛られ、組織運営の惰性に流され、あるいは一身の利害に汲々とするあまり、創造や改革を志向する協同的な人間関係が結ばれにくく、組織の不活性化を招きやすい現状を克服するために是非とも考えられなければなりません。また、人間や社会あるいは国家間の友愛と暴力の関係において、後者を如何に制御するか、も重要です。中国古代の任侠的結合関係は、そのような考察にどのような示唆を私たちに提供してくれるのでしょうか。人類史上の人間の経験に学びながら、これらの諸問題を考えていくことが今後の私の課題です。



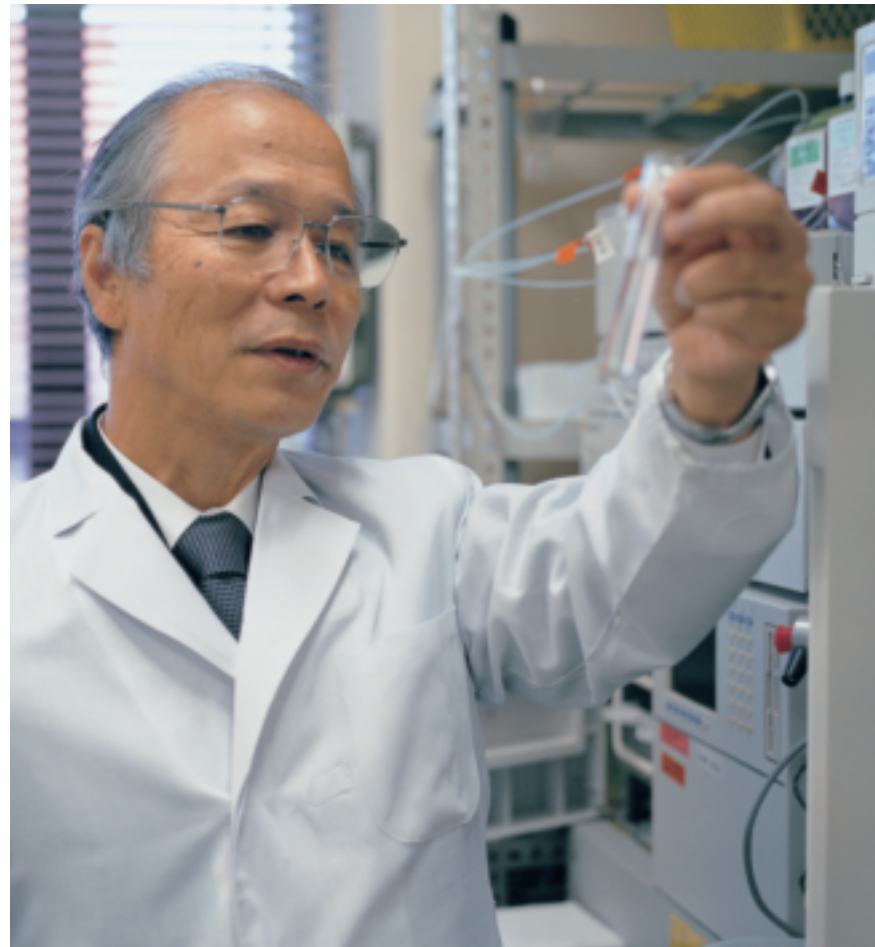
『史記』游侠列伝
（上杉本 国立歴史民俗博物館所蔵 国宝）



大学院生物資源学研究科教授
天野秀臣

あまのひでおみ
農学博士
専門は水産生物化学、海藻生化学、
食品栄養学、天然物化学
1944年生まれ

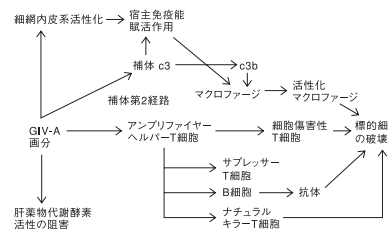
新しい食資源、医薬用資源として 海藻の機能を人々の健康に役立てる



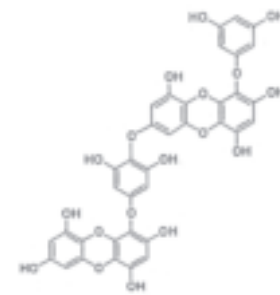
四方を海に囲まれた我が国は、多くの海洋生物資源に恵まれています。一方で、農産物とともに水産物も世界の輸入国であり、皮肉にも飽食による生活習慣病が問題となっています。食料も量から質への変換が必要と言われる中、三重大学大学院生物資源学研究科では、健康維持と向上に大いに役立つ海藻の機能性に注目し、研究を進めています。

抗癌効果をはじめとする海藻の機能

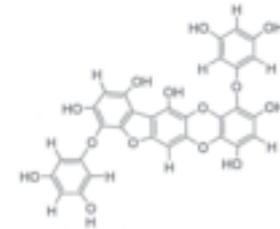
海洋生物資源にはさまざまなものがありますが、食用以外ではその利用はまだまだ不十分であり、海藻も未利用な部分が多く残されています。古来より我が国には海藻を食べる習慣がありましたが、それは単に刺身の「つま」程度の役でしかありませんでした。我々は海藻の持つ機能を求めて研究を続け、以下のようにいくつかの機能を明らかにすることができました。まず、我が国の死亡原因の第一位である癌に関し、我々は海藻の癌予防効果を20年ほど前から調べてきました。その結果、緑藻、褐藻、紅藻の多くのものに抗癌効果があるものの、海藻の種類によって効果のある癌が異なることがわかりました。その効果は主として褐藻のアルギン酸とフコイダン、紅藻のカラギーナン、フロン、ポルフィランという酸性多糖による



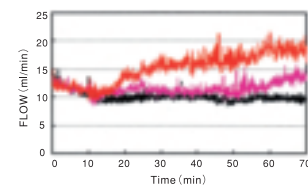
フコイダンの腫瘍免疫応答の機序概略(図1)



ジエコール(図2)



フロロフロフロエコールB(図3)



ノリペプチド投与による血流促進効果(図4)
(赤色はペプチド投与、ピンク色はプラセボ投与、
黒色は無投与)

ものであり、一部はリン脂質によるものでした。酸性多糖の抗癌機序をフコイダンを用いて調べたところ、有効成分が直接癌細胞を攻撃するのではなく、担癌動物の免疫を活性化し、その結果として抗癌作用が出てくることが判りました(図1)。最近、食物には癌細胞のアポトーシス(細胞死)を誘引する成分が多数知られているので、抗癌効果にはさまざまな機序があると思われます。

血圧・血中脂質低下、糖尿病合併症予防効果

海藻には古くから血圧低下効果があると言われてきました。また、血液中の脂質低下効果があることも知られています。それらの作用機序についてフロンを用いて調査したところ、血圧低下効果の要因はナトリウムを糞中に排泄し、血中のカリウム比率を増加させると共に、尿の排泄量を増加させるためとわかりました。一方、血中の脂質低下効果の要因は、血中から肝臓への脂質の移動ではなく、糞量の増加と糞中の総コレステロールの増加によるものでした。

同じく生活習慣病関連で言えば、全国に「糖尿病が強く疑われる人」は約740万人、「糖尿病の可能性を否定できない人」は約880万人います。合計すると約1,620万人になりますが、この人数は成人の6人に1人が糖尿病か糖尿病予備軍と推定されることになります。糖尿病は長年たつと糖尿病合併症を発症することが多いのですが、アルドースレダクターゼ(AR)はこの合併症の発症に深く関与している酵素とされ、その活性阻害は合併症の予防に重要です。そこで、多数の海藻のAR阻害効果を調査したところ、褐藻アラメに有効成分があることを確認。本研究科の今井邦雄教授との共同研究で、有効物質はジエコール(図2)であることが判明しました。

抗アレルギー効果と血流促進効果

日本人の1/3は何らかのアレルギー症状を持つとされ、アレルギーは国民病と言えるほどです。食品会社と共同で海藻から抗アレルギー成分を分離し、その構造解析を上記同様今井教授と共同研究をしたところ、新規物質フロロフロフロエコールB(図3)であることを突き止めました。海藻の新しい利用法の開発になると思われます。

また、寒くなると「手足の冷え」を訴える人がたくさんいます。これらは手足の血流不全が原因とも言われます。別の食品会社と共同でノリの血圧低下ペプチド(特定保健用食品として承認済み)の研究中に、これを飲むと体が温かくなり、肩こりがとれる被験者がいることが観察されました。このペプチドは投与10分後にはラットの尾部血流を促進させ、その効果は60分以上継続しました(図4)。現在その作用機序を解析中です。

海藻有用成分の大規模生産の試み

緑藻アナアオサには、含硫アミノ酸の一種であるシステノール酸が存在します。本アミノ酸は天然物としては比較的強いラット血小板凝集抑制作用を持っています。我々と共同研究者は、本アミノ酸生産のために、生長が極めて良い突然変異体の不稔性アナアオサの海上培養装置を提案しました(図5)。この突然変異体は自分の生長のために海中の窒素とリンを大量に消費しますので、不稔性アナアオサの大量生産は海の富栄養化の防止に役立つと同時に、本アミノ酸の大量生産もできます。閉鎖系海域に設置すると最も効果が発揮できると考えています。

このように海藻にはまだまだ我々の知らない多くの機能があります。やがて海藻が「刺身のつま」でなく、新しい食資源、医薬用資源としてもっと利用される日が来るでしょう。



不稔性アナアオサの海上培養装置(図5)



大学院工学研究科教授
今井正次

いまいしょうじ
工学博士
専門分野は、建築計画学、
地域施設計画学、ファシリティマネジメント
1943年生まれ

多様な学習形態を実現する 空間づくりを研究



教育や学校に関するさまざまな問題が噴出する中、
児童や教師の活動を支援する学習環境の必要性が高まっています。
三重大学大学院工学研究科建築学専攻では、
小学校での教室活用の実態を調査し、多様な学習形態に対応する空間を研究。
実際の小学校で、研究成果を反映した教室づくりに携わっています。

小学校の学習環境の現状

私は建築計画・ファシリティマネジメントを研究専門分野とし、医療福祉施設、教育施設、住宅、地域施設全般などを幅広く対象にしている。特に、施設を運営していくシステムと建築空間の関係を明確にして、設計に、あるいは効率的な施設運用に適用する方法論・手法をテーマにしている。

そして現在、研究対象の一つとしているのが、小学校である。落ちこぼれ・いじめ・学級崩壊等々の問題がマスコミで取り上げられない日はない。学力低下などの影響が、大学教育にまでおよび始めている。これはもちろん建築が解決できるわけではない。

しかし、7m×9m教室の片廊下一字配列の画一的環境の小学校では、多様な学習形態に対応することはできない。従って、個別学習など多様な学習形態に対応できる学校づくりとして、30年以上前から、いわゆる「オープンスクール」が提案され、既に3割近い小学校で、何らかの多目的スペースをもった学校が実現している。しかし、教師の多大な努力が継続されているごく限られた先進的な学校以外は、必ずしも十分活かされ



多気町立佐奈小学校の設計図
設計:日新設計(株)



吹抜けの多目的スペース。



階段前には大きなガラスの窓があり、
中庭とつながる。



教室の扉は前面ガラスで開放的。



教室内に設けたコーナーで遊ぶ子供たち。

た多様な学習形態が実現していない。

複式学級を調査し、課題を発見

多様な学習形態の併存を意図したオープンスクールの原点は、イギリスのノングレーディングシステムの実験から始まった。しかし、日本の複式学級に大きなヒントがあるという仮説のもと、主に県内の複式学級の教室活用の実態から調査研究を始めた。県内の複式学級は、統廃合で減少している一方、地理的に統廃合しにくい地域を中心に微増している。その中で、離島などを含む鳥羽市の5小学校で複式授業、主に学年別指導の観察調査を行った。2学年の授業の展開、教師の動き、レイアウトの変化等を捉え、課題を抽出した。学習形態は演習と討論が頻繁に転換しているが、2つの学年が別々に討論をしている場面も多く、児童の集中力が要求される。同一教室で二つの学習活動をする場合にも、それぞれの学習形態にあった環境づくりはほとんどなされていない。これらの課題を少しでも緩和するために、教室内に共用のテーブルを配し、授業展開のシミュレーションを行い、教室内の限られたスペースでは、学習形態の転換毎のレイアウト変更よりも、共用の机等を用意し、若干の場所移動の対応の方が現実的で効果があるのではないかと推測を行った。

オープンスペースの研究

また、県内でオープンスペースを持つ2小学校の228授業について、一コマの授業の中での学習の展開(講義、演習、討論・発表、実習)、スペースの活用状況を調査した。半数近くの授業でレイアウト変更・児童の移動を行っている。求められる学習空間は、学習内容・学習グループ人数・学年(発達段階)で異なる上、色々な形のグループ学習、個人学習が錯綜し、その都度相応しい学習空間は異なるため、きめ細かくそれらに対応できるしつらえと構成が必要である。家具レイアウト実験なども学校の協力を得て行い、特定の学習形態への適合の可能性も検討した。児童の学習環境形成能力は学年により差はあるが、その能力を活かし、主体的な学習空間の展開を支援するためには、オープンスペースのような余裕と家具が必要である。しかし、児童や教師がしつらえからのアフォーダンス(環境が発するメッセージ)を得、みずから展開を促すのは、適切な家具や、分節化しやすい空間・オープンスペースの構成である等々の知見を得た。

コーナーのある教室づくりを実践

最近、学年単学級小規模校である多気町立佐奈小学校の設計者選定にかかわり、選定された設計事務所の担当者が卒業生であったこともあり、設計指導する機会を得た。佐奈小学校は学年単学級なので、複数クラスによるチームティーチングなどの合同授業は比較的少ないと考えられる。従って、教室前のいわゆるオープンスペースはあまり大きくせず、単調な廊下型ではなく学習空間としてまとまりのある空間づくりを教室の雁行で実現した。多様な学習形態を実現しやすい分節した空間づくりとして、教室の中で2つのコーナーを設けた。このコーナーは概ね4m×2mで、小グループの討論・実習、個人の落ち着いた居場所になることを期待して計画した。また、この学校は小規模校なので、吹抜の多目的スペースと中庭を中心に、南北棟(普通教室棟と特別教室棟)が、スキップフロア(半階ずつずれた構成)になっており、全体のつながりがよく、一体感のある構成となっている。まだ、部分竣工して間もないが、授業中・休み時間の子どもたちの行動は、生き生きし、コーナーは遊びに、学習に活発に利用されている。今後さらなる検証を進めていくつもりであり、今までの研究成果を実践していく機会を持ちたい。

CLOSE-UP Interview

地域の疾病の原因究明が、世界の神経難病への新たな光に。

医学系研究科教授 葛原 茂樹

進行性で徐々に運動機能や脳機能が障害されていく筋萎縮性側索硬化症 (ALS) やパーキンソン病。いまだ原因がわからず、国の難病に指定されている。三重大学大学院医学系研究科の葛原教授は、こうした脳神経の難病を専門に研究している。中でも医療界の定説を覆し、世界の研究者を驚かせたのが、紀伊半島のALS^(※1) やパーキンソン認知症複合^(※2) の研究だ。その出発点には、教授の真摯な診療姿勢があった。

(※1) 進行性に全身の筋肉が痩せて四肢麻痺、発声・嚥下不能になる (※2) 運動緩慢や震えが特徴のパーキンソン症と認知症が一緒に出くる

写真：ALS/パーキンソン認知症複合患者の脳の標本

脳神経の疾病を専門に

神経内科の医師である葛原教授。この道に進んだきっかけは、魅力的な教授たちとの出会いだった。「大脳皮質は理性(logos)の脳、大脳辺縁系は感情(pathos)の脳だと話してくれた大脳生理学の先生がいて、脳とは面白いものだな感じました」と学生時代を振り返る。また、当時は薬の副作用や公害による神経傷害が社会問題になっていた時代で、失明や四肢麻痺を起こす薬害スモンや、「チッソ」の工業廃水中の水銀が原因の水俣病が問題化した時代。これらの患者救済と原因解明に奮闘していたのが、新分野としてきたばかりの神経内科の医師達で、大きな魅力と可能性を感じたという。また、「脳の疾病は推理小説と同じ」というのが教授の持論。「データを並べて理論的に推理すれば、必ず疾病=犯人がわかる。また、脳は数ミリ単位で神経機能がわ

かれているので、最新技術の検査より症状を見たほうが早く正確に疾病が診断できる場合もあるんですよ」

三重で出会った最大の研究テーマ

医師として臨床研究を基本とする教授は、その土地に住む人々の病気を中心に、地域に密着した研究を進めてきた。その研究人生で最大のテーマとぶつかったのは、三重大学医学部に新設された神経内科に1990年に着任し、しばらくたった頃だ。「ある日、手足の麻痺が進行する1人の患者さんが来院され、筋萎縮性側索硬化症(ALS)と診断しました。その約1年後に別の方が、また、その1ヵ月後に別の方が来院され、その方たちもALSでした。不思議に思ったのは、3人とも同じ村の住民だったことです」ALSは10万人に2~5人と言われる難病。それが人口1,400人の小さな集落から1年間に3名も患者が現れた。「私はふだんか

ら患者さんの住所を覚えているようにしているんですが、この3名の方が番地は違うが同じ地名であることに気がつき、これはおかしいと思いました」

紀伊半島に多発する疾病の再発見

実は、紀伊半島には昔からALSの多発地帯があることが知られていた。ガムでもなぜか同じ病気が多発していたが、80年代に消滅し、紀伊半島でも消滅が報告されていた。しかし「本当にそうなのか?」と疑問を抱いた教授は、すぐに患者の住む地区を訪ねた。すると「いまなお高率に患者が出ていました。しかも、ガムだけに多発すると信じられていたパーキンソン認知症複合と同じ病気も、多発していることがわかったんです」

地域の研究が世界的な意味を持つなぜALSやパーキンソン認知症複合という稀な病気が紀伊半島とガムだけに多発

するのか?なぜガムでは激減したのに、紀伊半島では多発が続いているのか?その原因究明に教授が取り組みはじめ、はや13年が過ぎた。「紀伊の多発地帯は消滅したという定説があり、当初は存在すると認めてもらうだけでも大変でした。しかし、今は世界が私の研究に注目してくれるようになりました。ガムだけでなく、西ニューギニアや西インド諸島でもALSが多発していて、私も現地でも調査をしてきました」現地に行くと新しいヒントが得られる。地道で泥くさい仕事だが、研究室で試験管だけをふっているだけが研究ではない、と教授は笑う。一方で、教授は疾病の遺伝的要因を疑い、他大学などと共同で原因遺伝子の研究を進めている。「この紀伊でALS、パーキンソン症や認知症が多発する原因がわかれば、世界中にある神経難病の原因の解明に必ずつながります。ローカルな問題の解

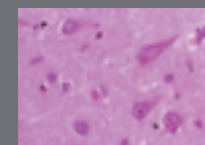
明が普遍的な意味を持つようになるのです。定年までに原因を突き止めるのが、私の大きな夢ですね」

地域へ注ぐあたたかな視線

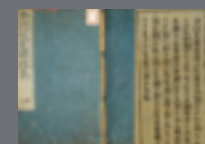
病院での診療や大学での講義に追われる忙しい日々。その合間をぬって、僻地や世界の未開の地にまで足を踏み入れ、研究に挑む力はどこにあるのだろうか。「人類のためなんて大げさなものではないですよ。原点は知的好奇心。もちろん、倫理感と正義感と責任感に裏打ちされていくことが前提です」と教授。真理の追求こそ大学人の役目と、あくまで学者の本分を強調する。しかしながら想像するに、並大抵の心掛けでは、大学病院の教授が患者一人ひとりの住所を覚えておくことはできないだろう。気さくな話しぶりに宿るのは、学者としての高潔な精神。そして、地域の人々に注ぐあたたかな視線が、そこにある。



同時に3人で見ることのできるディスカッション顕微鏡。これを使って脳細胞中のALSを調べる。



顕微鏡で見た紀伊ALS患者の脳の海馬の神経原線維変化と平野小体(HE染色)



羊歯病の最初の記載。「本朝故事因縁集」元禄2年(1689年)刊(京都大学図書館蔵、許可を得て使用)



西インド諸島では、Corosolという実と葉に含まれる成分が原因ではという仮説もある。現地に調査に向いた。



ALSが多発している西ニューギニア(バブア)にも調査に向いた。現地の子供と。



日本機械学会 「流体工学部門賞」を受賞

三重大学大学院 工学研究科システム工学専攻
教授 社河内 敏彦

大学院工学研究科の社河内敏彦教授(システム工学専攻)が、日本機械学会(<http://www.jsme.or.jp/>) (会員数約40,000名)より第84期(2006年度)流体工学部門賞を受賞しました。これは、長年にわたる混相流を含む各種噴流、後流およびはく離流れ現象、特に非定常流動現象の実験的、理論的解明への取り組みなどの業績と、また最近では「噴流現象の基礎と先端的应用に関する研究分科会」の主査ならびにその総括として2005年10月に開催された国際会議「International Conference on Jets, Wakes and Separated Flows」の組織委員長を務めるなど、流体工学の発展への多大な貢献に対して贈られたものです。



「Certificate of Merit」を受賞

医学部附属病院の中山良平助手(中央放射線部)が、2005年12月シカゴで開催された北米放射線学会(Radiological Society of North America) (<http://www.rsna.org/>)の国際会議にて、放射線医学の発展に寄与する優れた研究に対して贈られる「Certificate of Merit」を受賞しました。この研究は、竹田寛教授(病態修復医学講座)、山本皓二教授(環境社会医学講座)らと共同で進めてきたもので、コンピュータ支援診断分野で初めて、過去と現在の病巣における画像特徴の経時的変化に着目し、組織学的分類を識別するコンピュータ支援診断システムを開発したことが高く評価されたものです。

2006年6月～11月 三重大学の主な出来事

(三重大学広報誌「Flash News」より)

詳しい情報を知りたい方は、下記アドレスのページをご覧ください。
<http://www.mie-u.ac.jp/home/flash/index.html>

- 第38号
- 3プログラムJABEE認定
 - 岡三ホールディングス(株)と産学連携推進に関する包括協定を締結
 - 「三重大学振興基金」発起人会開催
 - 電気通信自由化20年記念講演会
 - 中華人民共和国広西医科大学と学部間協定の締結
 - 学生の授業評価アンケートに基づく表彰式開催
 - 教育改善のための国際シンポジウム・ワークショップを開催
 - タマサート大学科学技術学部長が来訪
 - 第5回産学官連携推進会議

- 第39号
- 文部科学省平成18年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブに採択される
 - 文部科学省平成18年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム:地域活性化への貢献(地元型)」に採択される
 - 「平成18年度国際教育推進プラン」に採択される
 - 三重大学ロボコンクラブ「M³RC」学長表彰
 - 平成18年度「三重県との定期懇談会」
 - 「ロボ学長フォーラム」開催される
 - 科学研究費補助金説明会
 - 利益相反に関する講演会・説明会を開催
 - 大学院生物資源学研究所が多気町と相互友好協力協定締結
 - 三重大学環境ISOロボ・キャラクター決定
 - 他教員の事例に学ぶMoodle学習会を開催
 - 大学院工学研究科長が選出される
 - 附属図書館から

- 第40号
- 文部科学省平成18年度「特色ある大学教育支援プログラム」に採択される
 - 「歴史街道GIS」の一部運用開始に関する記者会見
 - 「みえメディアコンソーシアム」に向けての第1回会合
 - 「異文化理解セミナー」
 - 「高大連携」
 - 第6回国際環境シンポジウム「四日市学」開催
 - 第22回APAN国際会議に参加
 - SVBL第2期研究プロジェクトキックオフ会議開催
 - 津波避難訓練
 - 工学部で「ロボット競技会2006」開催される
 - 附属図書館のマスコットキャラクター、愛称は「ブックロウ」に決定!
 - 国際交流サロンで留学生と職員の座談会開催
 - 「Jロボコン2006in三重」
 - 三重大学がんセンターの紹介
 - 天津師範大学で「合作弁学日本語コース」
 - 「高大連携サマーセミナー」開講
 - 「国際教育推進プラン」始動
 - 「災害対策プロジェクト室の研究および活動成果報告会」開催
 - サマースクール「夏期日本語日本文化研修」開催
 - 「国際インターシッピングプログラムの実施に向けたシンポジウム」出席
 - 大学院生物資源学研究所が連携大学院生の募集開始を発表
 - 生物資源学部で「保護者懇談会」開催
 - 「モーツァルト生誕250周年記念レクチャーコンサート」開催
 - 保健管理センターから
 - 国際交流センターから

- 第41号
- 平成19年9月ISO認証取得を目指し、様々な活動を開始
 - 科学研究費補助金説明会
 - 「オープンソースを使ったWebGISおよびセンサーネット」に関するセミナー
 - 新理事ご挨拶
 - 施設部職員と学生で施設点検パトロールを実施
 - 三重県科学技術振興センター視察会開催
 - 越智博通氏(三重大学OB、中国企業社長)による講演会を開催
 - 生物資源学部教育貢献表彰
 - 講演会「アカデミック・ハラスメントをなくすために」を開催
 - JICA国際協力入門セミナー
 - 教育学部長候補選出
 - 国際交流センターから

- 第42号
- 「第13回3大学国際ジョイントセミナー・シンポジウム2006」を開催
 - 中部電力との環境報告書意見交換会
 - 伊賀市で学長が講演
 - 「平成18年度大学教育改革プログラム合同フォーラム」を開催
 - 名誉教授懇談会
 - 「知的財産活用シンポジウム」を開催
 - JSTSORST発展研究、船岡正光研究プロジェクト公開シンポジウムを開催
 - シンポジウム「津市の多文化共生を考える」が開催
 - 「秋のミニオープンキャンパス」を開催
 - フレンドシップコンサート
 - 発明コンクール
 - 「リーディング産業展みえ2006」
 - 「実験動物感謝式」を挙行
 - 大学院生物資源学研究所長を選出

編集後記

法人化3年目も終盤にさしかかり、大学の教職員の忙しさに拍車がかかっています。世間ではいろいろな意味で教育が話題になっていることも踏まえ、本号では大学のバックボーンを形成する文系教育の今後の戦略に焦点を当てています。地域を支えつつ、国際貢献にも積極的に関わるためには、理系・文系に拘わらず「弱者に対するやさしさ」と「教養」をバランスよく併せ持つ人間の育成が不可欠です。研究フロントもこの文脈でお読みいただければ幸いです。

[発行]
三重大学広報委員会

三重大学総務部広報チーム
〒514-8507 津市栗真町屋町 1577番地
TEL 059-231-9789 FAX 059-231-9000

<http://www.mie-u.ac.jp/koho@ab.mie-u.ac.jp>

本誌掲載の文章・記事・写真等の無断転載はお断りします。
印刷・製本 株式会社 三晃社



三重大学広報委員会

www.mie-u.ac.jp/